

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520189

研究課題名（和文） 鷹書類の調査と研究

研究課題名（英文） An investigation and study of the book of the falconry.

研究代表者

中本 大 (DAI NAKAMOTO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70273555

研究成果の概要（和文）：

4年間の研究期間において約850点の鷹書類のマイクロフィルムや画像データを蒐集し、それらの翻刻・注釈作業を通して各テキストが持つ意義や価値について明らかにした。また、これらの鷹書類をデータベース化して、各書の特性が一覧できるように整理・分類するための基礎作業も一通り達成した。その作業の過程において奥書などの書誌データを基に、それぞれの鷹書類の成立過程や流布・伝来の状況についても一定の解明ができた。

研究成果の概要（英文）：During four years, I performed collection of a microfilm and the image data of approximately 850 books of books of the falconry. I analyzed those texts and clarified it about significance and the value that each text had. In addition, I compiled these books of the falconry into a database, and rearranging, one way of basic work to classify it was accomplished. In addition, constant elucidation was possible about the situation handed down an establishment process and the spread of each books of the falconry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：鷹書類・鷹百首・古技保存・諏訪流放鷹術・宮内庁書陵部

1. 研究開始当初の背景

我が国の伝統文化である「鷹狩り」は、その長きに渡る歴史にも関わらず、廃絶の危機にさらされている。本研究は、そのような状況の中、鷹狩りの正しい文化的理解と保存に貢献すべく、「鷹書類」という古典籍に注目し、その調査を試みようとするものである。鷹書類とは、鷹に関する和歌・説話・縁起

などの文学的な内容や、鷹狩りに関する実技的な内容などを記載した書物のことで、わが国では中世以降に盛んに制作された。その総数は現存が確認されるものだけでも2,000点以上あり、一大文献群をなしている。これらのテキストは、単なる放鷹技術の知識のみならず、鷹に関わる文化や教養の伝播においても重要な役割を果たしていたことが予想さ

れる。しかしながら、これまでの文化史・文学史研究において鷹書類が取り上げられることはほとんど無く、ましてや人文科学的視点から同文献群をとらえる研究は皆無であった。わずかに、戦前の宮内省が編纂した『放鷹』（吉川弘文館、1931年12月）が唯一のものであろう。

ところで、明治から戦前においてわが国では、「古技保存」の政策のもとに鷹狩りを公式行事として継承するため、かつて徳川将軍家直参であった諏訪流の鷹匠たちを宮内省式部職に所属させた。上掲のように宮内省式部職が『放鷹』を編纂したのも、そのような「古技保存」の流れと連動するものである。しかし、宮内庁に属した最後の鷹匠が昭和51年に退職して以来、公職としての鷹匠は不在となった。わが国の鷹狩り文化が急速に廃れていったのはこれを契機とする。こうした憂慮すべき状況を回避するには、古典的な放鷹に関する諸事象を研究することが早急に必要であると思われる。鷹書類はその諸事象のなかでも、放鷹文化の伝統的な本質を理解するもっとも有用な手がかりといえるものである。

如上のような状況を背景に、『放鷹』の成果をさらに発展させるべく、本研究は鷹書類とその背景にある文化的諸相を明らかにすることを目的に開始されたものである。

2. 研究の目的

先にも述べたように、我が国の伝統文化である「鷹狩り」は今や廃れようとしている。本研究はそのような危機的状況を鑑みて、古典文化としての放鷹術の意義を明らかにし、その価値を正しく理解することを目的とする。

具体的には、種々の鷹書類を調査・研究することによって、従来、ほとんど明らかにされてこなかった我が国の放鷹文化の実相を解明すると同時に、鷹書類をめぐる鷹術伝承を介した文化交流の諸相についても明らかにすることを目指す。この文化交流の諸相については、たとえば、諏訪流の鷹術は、中世～近世にかけて全国でもっとも隆盛した流派であるが、周知のとおり、信州・諏訪大社の贄鷹の神事に端を発し、その神事に奉仕した信州在地の武士である禰津氏の携えた鷹術である。しかしながら、鎌倉時代末期にはすでに京都の公家である西園寺家の鷹書類に諏訪流の情報が取り込まれ、記載されているのが確認できる。このことから、相当早くに諏訪大社や同社に所縁深い東国武士と西園寺家との間に鷹書類を介した交流のあったことが予想される。また、その西園寺家は、五摂家に次ぐ清華家の名門として知られるが、いわゆる西園寺流とよばれる公家の鷹狩りの家でもある。さらに、京都府長岡京市在

住の調子氏宅には同氏伝来の鷹書類が数点所蔵されている。調子氏は、中古から中世にかけて隨身として活躍した下毛野氏の末裔である。その下毛野氏は、『徒然草』などによると、代々鷹匠をつとめた氏族でもあった。その他にも、下野国（栃木県宇都宮市）の平野氏には当家代々の秘伝書として鷹書が伝来しているが、同氏は中世末期まで続いた宇都宮流の鷹術を担った一族である。そして、先に挙げた信州・諏訪大社の贄鷹の神事に従事した禰津氏とはまた別に京都で新たな諏訪流の鷹術を創設した京都諏訪氏（諏訪円忠の末裔）もまた鷹書を携えている。これらは、堂上（西園寺家）、地下（下毛野氏）、地方武士（禰津氏・平野）、在京の武士（諏訪氏）というそれぞれ乖離した伝派の鷹術書であるが、各々の記述内容を検してみると、直接の典拠関係が指摘できるような記事やテキスト同士を摺り合わせたような内容が多数散見する。このことから、鷹書類には、属性・位相の相違や地域差を超えてある種普遍化した画一的な情報交流のあったことが予想される。すなわち、鷹書類に記載されている記載内容を明らかにすることは、これまで知られてこなかった中世期における文化交流の在り方を新たに探つてゆく有効な手がかりになることが判じられるものである。

以上のような研究目的から、調査対象とするテキストは全国各地の博物館、美術館、公文書館、図書館、官公庁、大学といった施設に所蔵されているもの以外に、個人蔵などの埋もれた鷹書類についても適宜発掘してゆく。そして、その鷹書類をめぐる文化交流のネットワークと伝承世界を明らかにするという独創的かつ斬新なアプローチによって、文化研究史においても新しい展望を開拓することも同時に期するものである。

3. 研究の方法

まずは、鷹術の主流である諏訪流の鷹書類について、宮内庁書陵部のものを中心に調査・研究を進める。調査対象となるテキストについてはすべてマイクロフィルムもしくは画像データ化して収集する。

さらに、個人蔵として埋もれている未知の鷹書類を発掘・蒐集するため、全国の「鷹匠」の家を調査し、各家伝来の鷹書類の存在を明らかにする。

収集した鷹書類はすべて翻刻して注釈を付し、それぞれのテキストが持つ意義や価値について明確にしてゆく。最終的には収集したすべての鷹書類をデータベース化して、各書の特徴が一覧できるように整理・分類し、比較検討を通して相対的なテキストの位相も明確にする。また、各テキストの外形や筆跡、奥書などの書誌データも整理して、それぞれの鷹書類の成立過程から流布や伝来の

状況について明らかにする一方、地方で発掘・収集した鷹書類については、現地をフィールドワークして、鷹書類をめぐる伝承背景についても解明してゆく。

なお、如上の作業は研究代表者と研究分担者が発起人を行っている「鷹書研究会」での活動を中心に展開する。具体的には、年に6回、研究会の例会を開催して鷹書類の輪読と研究発表を実施する。さらに、同会主催（もしくは共催）で年に1~2回「放鷹文化講演会」を開催し、研究成果を広く一般に還元することも目的とする。

4. 研究成果

(1) 平成20年度の主な研究成果

研究代表者である中本大と研究分担者である黒木祥子・二本松泰子・山本一が発起人を務める「鷹書研究会」の例会を6回開催した。例会では主に立命館大学図書館西園寺文庫に所蔵されている西園寺家の鷹書類の輪読を中心に進めた。具体的には『西園寺家鷹口伝』(函号210)と『西園寺家鷹秘伝』(函号193)の二書を取り上げて、本文を翻刻し、注釈を付した。両テキストの主な輪読成果としては、持明院家の鷹書類と非常に近似した内容を有することが確認できた。ちなみに、持明院家は西園寺家と同じく公家の鷹の家として知られるが、『三内口決』によると、同家は縁戚関係にある西園寺家から鷹道を伝授されたという。中世期における西園寺家の鷹書類が公家流の放鷹文化に多大な影響力を与えていたことが窺えるものである。なお、この輪読の成果は成稿して伝承文学全注釈叢書『立命館大学図書館西園寺文庫蔵鷹書類』(三弥井書店)から刊行予定である。また、宮内庁書陵部に所蔵されている鷹書類を中心に、各所で所蔵されているテキストを数百点、マイクロフィルムもしくは画像データで蒐集して目録を作成、鷹書類の総合的なデータベース作りのための基礎作業も行った。

その他、11月22日には、鷹書研究会主催、諏訪市教育委員会共催で「第1回放鷹文化講演会」を諏訪流の鷹狩発祥の地である長野県諏訪市で開催した。講演会のテーマは「諏訪と鷹狩」で、諏訪流放鷹術保存会による放鷹実演と、中澤克昭(長野高等工業専門学校准教授・鷹書研究会会員)、二本松泰子、福田晃(立命館大学名誉教授・鷹書研究会会員)の3名による公開講演を実施した。さらに、平成21年1月9日、京都市の「キャンパスプラザ京都」で鷹書研究会と日本放鷹協会の共催で「第1回鷹狩り文化講演会」を開催した。講師は二本松泰子、室伏三喜男(日本放鷹協会会長)。このような講演会を通して本研究の成果を広く一般に還元することができた。

(2) 平成21年度の主な研究成果

平成20年度より引き続き鷹書研究会の例会を6回開催した。当該年度は諏訪流の鷹書の輪読に取り組むべく宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』(函号163-902)と同蔵『才覚之巻』(函号163-928)二書を取り上げて本文を翻刻し、注釈を付した。両書の輪読の主な成果としては、鷹書の中でパターン化されているいくつかの鷹説話に独特のシンボリックなモチーフを取り込み、独自の異伝を記載することによって、他の伝派との位相差を主張していることが確認できた。このことは、鷹術の属性(流派)が確立されてゆく過程において、それぞれが携えた鷹書に記載されている説話や縁起が重要な役割を果たしていたことを窺わせるものである。さらに、同じく昨年度からの継続作業として、宮内庁書陵部・国立公文書館に所蔵されている鷹書類を中心に、数百点の鷹書をマイクロフィルムもしくは画像データで蒐集して目録を作成、鷹書類の総合的なデータベース作りのための基礎作業も並行して行った。

また、8月2日と12月5日の2回にわたって、国立公文書館内閣文庫・宮内庁書陵部・尊経閣文庫に所蔵されている持明院家の鷹書について精査した。その結果、公家流の鷹の家として中世期によく知られた当家の鷹書類について、奥書に記載されている年記の上限が永正年間であることや伝本同士の転写が中世後期から近世初期(承応年間頃)の期間に最も盛んに行われていたことが確認できた。そのことによって、中世~近世にかけての持明院家の鷹書類の成立の実相や流布の過程が具体的に解明され、公家の鷹の家における放鷹文化の一端が明らかになった。

その他にも、11月22日には、静岡文化芸術大学主催、静岡市・鷹書研究会共催で「第2回放鷹文化講演会」を諏訪流放鷹術の庇護者であった徳川家康ゆかりの地である静岡県静岡市で開催した。講演会のテーマは「徳川家康公と鷹狩」で、諏訪流放鷹術保存会による放鷹実演と、岡崎寛徳(慶応義塾大学兼任講師)、須田悦生(静岡文化芸術大学特任教授)の2名による公開講演を実施した。

(3) 平成22年度の主な研究成果

当該年度も引き続き鷹書研究会の例会を6回開催し、鷹書類の輪読を進めた。当該年度は宇都宮流の鷹書を取り上げるべく立命館大学図書館西園寺文庫蔵『宇都宮社頭納鷹文抜書秘伝』(函号195)について本文を翻刻し、注釈を付した。同書の輪読の主な成果としては、京都の公家である西園寺家の鷹書や諏訪円忠の子孫である京都諏訪氏の携えた鷹書と非常に近似した内容を持つことが確認できた。同書の作者は宇都宮在住の地方武士である平野氏であり、西園寺家や諏訪氏と直接

交渉を持った形跡はない。にも関わらず、テキスト間においてこのような類似性がみられることは、むしろ地方武士が京都の放鷹文化を摂取するためのツールとして鷹書を利用して証左であると判じられ、中世期における鷹書類の文化的役割の一事例を具体的に明らかにすることができた。さらに、同じく当該年度においても宮内庁書陵部・国立公文書館などに所蔵されている鷹書類を中心に、数百点の鷹書をマイクロフィルムもしくは画像データで蒐集して目録を作成、鷹書類の総合的なデータベース作りのための基礎作業も継続して行った。

また、研究分担者の二本松泰子は、6月末に2泊3日で韓国調査に赴き、ソウル大学校中央図書館・同奎章閣、韓国国立中央図書館にそれぞれ所蔵されている『鷹鶴方』の各種伝本の調査を行った。その結果、『鷹鶴方』の伝本類には(1)韓国国内でのみ流布したテキスト(2)日本に教養書として伝来したテキスト(3)日本に技術書として伝来したテキストの3種類に分類できることが判明し、日本の鷹書類との相対比較を通して日本における韓国放鷹文化の受容形態が明らかになった。

その他、11月14日には、國學院大学院友会栃木県支部主催、宇都宮市・宇都宮教育委員会・鷹書研究会共催で「第3回放鷹文化講演会」を宇都宮流の鷹狩ゆかりの地である栃木県宇都宮市で開催した。講演会のテーマは「宇都宮と鷹狩」で、諏訪流放鷹術保存会による放鷹実演と、二本松泰子、細矢藤策(元國學院大學栃木短期大学講師)、福田晃(立命館大学名誉教授・鷹書研究会会員)の3名による公開講演を実施した。さらに、11月28日には、「第4回放鷹文化講演会」を徳川家康が17年間在城した浜松城のある静岡県浜松市で開催した。講演会のテーマは「家康公と鷹狩り」で、諏訪流放鷹術保存会による放鷹実演と、二本松康宏(静岡文化芸術大学准教授・鷹書研究会会員)、田籠善次郎(諏訪流放鷹術17代宗家・諏訪流放鷹術保存会会長)の2名による公開講演を実施した。

(4) 平成23年度の主な研究成果

当該年度も引き続き鷹書研究会の例会を6回開催し、鷹書類の輪読を行った。当該年度は科研費採択の最終年度に当たるため、主にこれまで輪読してきた成果の総括をして、伝承文学全注釈叢書『立命館大学図書館西園寺文庫蔵鷹書類』(三弥井書店)の出版に向けての本格的な準備を進めた。さらに、同じく当該年度においても宮内庁書陵部・国立公文書館などに所蔵されている鷹書類を中心に、数百点の鷹書をマイクロフィルムもしくは画像データで蒐集して目録を作成、鷹書類の総合的なデータベース作りのための基礎作業についても総括的な整理を行った。

また、研究分担者の二本松泰子は、12月15日～17日にアラブ首長国連邦アブダビ市内アル・アイン、ロターナ・ホテル内会議場で開催された“2nd International Festival of Falconry”において“Conference speaker”として招聘される機会を得たため、それを利用して以下のような調査を試み、成果を得た。

① 祭典における申請者のプレゼン発表を通して当祭典に参加している韓国の鷹匠たちとコンタクトを取り、情報交換をした。その結果、1993年12月に韓国の文化財管理局から刊行された『叫声(叫聲)調査報告書』の日本語訳のほか、韓国国立中央博物館をはじめとする韓国内の博物館で所蔵されている李王朝時代の鷹絵類のカタログを入手することができた。鷹絵・鷹図と鷹書類が密接な関係にあることはすでに先学において指摘されている(水野裕史氏「戦国時代における鷹図の画と詩」<「藝叢」第29号>など)ことから今回、入手できたカタログは日韓における鷹書類の研究を進展させるのに大いに有用である。

② 祭典において各国の鷹匠たちが出展していたブースやアブダビ市内にある国立の鷹専門病院“Abu Dhabi Falcon Hospital”を見学し、中央アジア・南アジアさらにはアラブ・ヨーロッパといった世界各国の鷹狩りについての歴史や伝統、あるいはそれぞれの技法の特徴についての調査を進めることができ、世界史上における日本の放鷹文化の意義や位置づけが明らかになった。なお、蒐集した資料はすべてデジタルデータ化して保存した。

その他、11月20日には、東御市・東御市教育委員会主催、静岡文化芸術大学・鷹書研究会共催で「第5回放鷹文化講演会」を諏訪大社の贄鷹の神事に奉仕した禰津氏ゆかりの地である長野県東御市で開催した。講演会のテーマは「放鷹文化と禰津氏」で、諏訪流放鷹術保存会による放鷹実演と、二本松泰子、石川好一(元東部町公民館長)、福田晃(立命館大学名誉教授・鷹書研究会会員)の3名による公開講演を実施した。さらに、12月3日には、「第6回放鷹文化講演会」を愛知県豊橋市で開催した。講演会のテーマは「三河・鷹丘 鷹狩りのふるさと」で、諏訪流放鷹術保存会による放鷹実演と、二本松康宏(静岡文化芸術大学准教授・鷹書研究会会員)による公開講演を実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

- ① 著者名：中本大、論文標題：菊隠慧叢について—『名備集』の研究序説（特集五山文学）、雑誌名：文学、査読：無、巻：第12巻第5号、発行年：2011、ページ：91-101
- ② 著者名：二本松泰子、論文標題：諏訪・大宮流の鷹書—廣田宗綱筆『鷹書才覚巻抄出』全文翻刻、雑誌名：立命館文学、査読：有、巻：第622号、発行年：2011、ページ：51-58
- ③ 著者名：山本一、論文標題：「やまひめに」類鷹百首の伝本について、雑誌名：金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、査読：無、巻：第2号、発行年：2010、ページ：141-150
- ④ 著者名：二本松泰子、論文標題：鷹飼「せいらい」の展開と享受—諏訪流の鷹術伝承をめぐって—、雑誌名：説話・伝承学、査読：有、巻：第18号、発行年：2010、ページ：127-144
- ⑤ 著者名：黒木祥子、論文標題：立命館大学西園寺文庫蔵『西園寺家鷹秘伝』について、雑誌名：神戸学院大学人文学部 人文学部紀要、査読：無、巻：第30号、発行年：2010、ページ：238-248
- ⑥ 著者名：二本松泰子、論文標題：下毛野氏の鷹書—他流儀のテキストと比較して—、雑誌名：日本語・日本文化、査読：無、巻：第35号、発行年：2009、ページ：1-26
- ⑦ 著者名：二本松泰子、論文標題：政頼流の鷹術伝承—立命館大学西園寺文庫蔵『政頼流鷹方事』をめぐって—、雑誌名：伝承文学研究、査読：有、巻：第58号、発行年：2009、ページ：12-25
- ⑧ 著者名：二本松泰子、論文標題：「鷹書」の使役動物観—諏訪流のテキストを中心に—、雑誌名：動物観研究、査読：無、巻：第14号、発行年：2009、ページ：19-26
- ⑨ 著者名：中本大、論文標題：絵画情報集積・発信拠点としての五山禅林—「画題」研究序説（特集＝古典文学の精髓としての漢詩文—中世・近世・近代）—（中世から近世へ）、雑誌名：国文学 解釈と鑑賞、査読：無、巻：第70巻第10号、発行年：2008、ページ：11-20
- ⑩ 著者名：二本松泰子、論文標題：下毛野氏の鷹術伝承—山城国乙訓郡調子家所蔵の鷹書を手がかりに—、雑誌名：立命館文学、査読：有、巻：第607号、発行年：2008、ページ：1-9
- ⑪ 著者名：二本松泰子、論文標題：諏訪流の鷹術伝承—みさご腹の鷹説話をめぐって—、雑誌名：論究日本文学、査読：有、巻：第89号、発行年：2008、ページ：25-41

〔学会発表〕（計6件）

- ① 発表者名：二本松泰子、発表標題：“Research on the books of the Japanese falconry from the 13th to the 16th century”、学会名等：The Third International Festival of Falconry Conference speaker、発表年月：2011年12月15日、発表場所：アラブ首長国連邦アブダビ市内アル・アイン、ロターナ・ホテル内会議場
- ② 発表者名：二本松泰子、発表標題：京都諏訪氏の鷹書制作—天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』をめぐって—、学会名等：中世文学会、発表年月：2011年11月13日、発表場所：天理大学（奈良県）
- ③ 発表者名：二本松泰子、発表標題：日韓放鷹文化考—『古本鷹鶴方』の享受をめぐって—、学会名等：『月庵醉醒記』の会、発表年月：2011年6月11日、発表場所：南山大学（愛知県）
- ④ 発表者名：二本松泰子、発表標題：「せいらい」の展開と享受、学会名等：説話・伝承学会、発表年月：2009年4月19日、発表場所：天理大学（奈良県）
- ⑤ 発表者名：二本松泰子、発表標題：鷹書からみた使役動物観、学会名等：動物観研究会、発表年月日：2008年12月7日、発表場所：東京農工大学（東京都）
- ⑥ 発表者名：二本松泰子、発表標題：政頼流の鷹術伝承—立命館大学西園寺文庫蔵『政頼流鷹方事』をめぐって—、学会名等：伝承文学研究会、発表年月日：2008年8月31日、発表場所：キャンパスプラザ京都（京都府）

〔図書〕（計3件）

- ① 著者名：服部幸造、小林幸夫、藤井奈都子、小助川元太、佐々木雷太、徳竹由明、日沖敦子、榊原千鶴、二本松泰子、弓削繁、辻本裕成、徳田和夫、出版社名：三弥井書店、書名：中世〈知〉の再生—『月庵醉醒記』の論考と索引—、発行年：2012、総ページ数：183~210ページ
- ② 著者名：二本松泰子、出版社名：三弥井書店、書名：中世鷹書の文化伝承、発行年：2011、総ページ数：354ページ
- ③ 著者名：滝川幸司、田島智子、海野圭介、胡秀敏、佐藤雅代、佐藤明浩、堤和博、加藤昌嘉、中村一夫、伊藤鉄也、川崎佐知子、中川照将、岩坪健、藤井由紀子、阿部真弓、箕浦尚美、中原香苗、山崎淳、松原一義、中本大、藤田保幸、出版社名：笠間書院、書名：日本古典文学研究の新展開、発行年：2011、総ページ数：516ページ

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

鷹書研究会のブログ

<http://takasyoken.exblog.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中本 大 (NAKAMOTO DAI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：70273555

(2) 研究分担者

黒木 祥子 (KUROKI SYOUKO)
神戸学院大学・人文学部・教授
研究者番号：10107120

二本松 泰子 (NIHONMATSU YASUKO)
立命館大学・文学部・講師
研究者番号：30449532

山本 一 (YAMAMOTO HAJIME)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：40158291